学術コミュケーション（出版）から宗教心理学に期待すること、協働できること

木村　健（特定非営利活動法人 ratik）
URL: http://ratik.org　　E-mail to:tkimura@ratik.org

【発表要旨（←2014 年 4 月提出分）】

一冊の本は研究者の人生を変えてしまう力を持っている。他方、大量生産・大量消費を前提にした印刷・出版は近々に迫る「人口減少社会」を前にして存続の危機にある。次代に向けて「書籍」を通した「学術コミュニケーション」をいかに確保していくか。「心」を扱う諸学・諸実践にとって避けて通れない「宗教」という主題において、たとえ小規模でも緻密に議論を深めるための場を生み出すためにできることを考えてみたい。

いきなり結論めいたところから…

◆「内容（contents）」ではなく「行動（action）」

- 今回は「宗教心理学に期待することは**何か**？」「宗教心理学と協働できることは**何か**？」という**「問い」**に答えに来たのでは**ない**。
- そうではなく「宗教心理学に**期待するのだ**」「宗教心理学と**協働するのだ**」という**「宣言」**をしに来た。

◆「～しなければならない」から「～せずにはいられない」へ

- 他の学術・実践の領域・分野に対するのと同様、「宗教心理学に**期待せざるを得ない**」「「宗教心理学と**協働せざるを得ない**」、また、それが**出来なければ**、私のようなタイプの出版人・編集者は**生存していけない**。**それは何故か？**
- この**「危機感」**は、**各学術・実践の領域・分野にもまた**当てはまるのではないか。すなわち、精神保健福祉、生命倫理、死生学…等々のいずれも、「出版」と同様、「宗教心理学に**期待出来ない**」「宗教心理学と**協働出来ない**」とすれば、その営みを**存続していけない**のではないか。さらには逆に、**宗教心理学も**他の領域・分野に対して…。**それは何故か？**
- ネガティヴ（パッシヴ？）には「宗教心理学に**期待しなければならない**」「宗教心理学と**協働しなければならない**」だが、よりポジティヴ（アクティヴ？）に「宗教心理学に**期待せずにはいられない**」「宗教心理学と**協働せずにはいられない**」という**「心躍る側面」はないだろうか？**

自己紹介

◆ratik とは…

- ratik（**らていっく**）は、**2013 年 5 月設立**の**特定非営利活動法人（NPO 法人）**。
- 人文・社会科学領域の専門書・新刊を、**電子書籍**として**出版**（企画・編集・制作・販売）。
- とりわけ**「心」を扱う幅広い領域・分野**に興味・関心。
- 学問やそれに根ざす実践にかかわる情報を**「選り集め、編み、発信する」**ことで、**学術コミュニケーションの活性化**を目指す。
- 広く市民（中心的には、**事業活動の「受益者でありかつ供益者」である研究者・実践家**）の**参画**が得やすい組織形態として「特定非営利活動法人」を選択。
- NPO = Non-Profit Organization。そもそも、学術・実践の領域で「営利」を追求しようとは思っていない。或る意味では、この領域で**「営利」を追求すべきではない**。
- 何故ならば**「学問における重要度」**は、特定の時代において「たくさん**売れること**」とは**無関係**だから。
- **「学問にとって何が重要か」**の選別は難しいが、学術・実践の領域では、少なくとも**「市場原理」「営利の追求（利益**

の最大化と、その分配）」とは**異なる判断規準**に基づいて出版**コンテンツの多様化**を図っていかねばならない。

- ただし、組織の事業活動が全て**「無償ボランティア」**によって担われるべき**ではない**（全ての人が市場経済の中で暮らしている以上、専従者の最低限の生活は確保しなければならない。しかし、…）。

（ratik の web ページ参照：http://ratik.org/about-us/）

◆ここに至るまでに…

- 「理系」でキャリア・スタート。**「建築学」**を学び、都市計画・まちづくりに関わる**シンクタンク**に勤務。
- 30 歳を目前に一念発起して**「哲学」**に転向、**10 年をかけて博士号**取得。
- 年齢的に遅かった「スタート」により、「大学院重点化」に伴う「ポスドク大量生産時代」に直面（折しも大学における「教養課程の廃止」の流れの後で、哲学領域の研究者ポストは減少）。
- 以後の会社勤務の期間と合わせて、**学術専門書出版**には**8 年あまり**携わっている。

（ratik の web ページ参照：http://ratik.org/about-us/members/takeshikimura/）

「宗教心理学」と「学術専門書出版」の接点としての「限られたパイ」

◆少子化・人口減少社会の中での「学術専門書出版」

- そもそも「**本質的に**学術専門書は**売れない**（或る意味では、売れなくて当然）」。
- また、そもそも印刷媒体の書籍は**「大量生産・大量消費」を前提**としたコミュニケーション手段。
- 例えば、学術専門書**流通**を支える仕組みの**変貌。**
- 例えば、学術専門書出版の 1 つの**「ビジネスモデル」の終焉**???
- **先鋭的なテーマ**の専門書出版における暫定的な解法としての**「オンデマンド印刷」**と、解消し難い非効率。

◆少子化・人口減少社会の中での「宗教心理学」

- 単体としてみた場合、「宗教心理学」は、必ずしも国内の**「メジャーな研究コミュニティ」とはいえない。**
- ただし、今後も当面、国内の**若年人口の減少**は続いていくだろう。
- こうした状況下、宗教心理学は、**後進の育成**から**先端的探求**までを含めて、どのように**「研究コミュニティ」**を**維持・発展**させるのか、また、そのための広義の**「学術コミュニケーション」**をいかに確保するか???

◆「宗教心理学」と「学術専門書出版」の共通の課題（ローカルな学術コミュニケーションの課題）

- **「出版」**にとっては、**「コミュニケーション促進」の対価**（例えば書籍売上）が或る程度、**確保できなければ**、いくら NPO であったとしても、**事業活動を維持していけない。**
- 他方で**「宗教心理学」**にとっても、コミュニティが研究・実践を継続・発展させていく上で、一定量・頻度の**学術コミュニケーションが不可欠**（学問が先人や同時代の仲間の知恵や成果の上に成立する以上、その時々に適切な情報が得られねばならない）。
- 各々の存続と発展のために、

○今後も縮小していく可能性の高い「限られたパイ」の中で、
必要不可欠となるコミュニケーションを、どのように確保していくのか？
○「ハイブロウな先端研究」から「初歩レベルの教授・学習」まで、
やり取りされるコンテンツの多様性を、いかに担保していくのか？

「限られたパイ」に対処するための幾つかの解法

◆コミュニケーション確保のための「応分の負担」

◆グローバル化の中で「国内」に固執せず、「英語圏」をはじめ、より広域に同一分野・領域と結びついていく

- 医学・生理学、脳神経科学、物理学、数学…etc.が選択した方略。
- **研究・実践上の公用語**としての**「英語」**???
- 宗教心理学内の幾つかのジャンルも、この方略を選択することは可能かもしれない。

↓

- ただし、宗教は個々の人の**「個別の生」**と深く結びついている（ex.「宗教へのコミット」「宗教からの影響／効能」は個人の置かれた個別の状況・文脈に依存する）。
- その**「心理」**をすくいとるには、緻密な**「言葉」**と、その精緻な**「やり取り」**が必要。
- こうしたコミュニケーションを成立させるのには、言語として各研究者の**母語**が不可欠。
- 「人口減少社会」とはいえ、1つの言語を共有する者が**「一億人」**規模で存在する、というのは世界的にみても多くない（≒恵まれた言語環境）。ただし、ここでは「日本語」内のローカルな違いに関しては、ひとまず捨象しておく。

↓

◆「国内」で関連する他領域・他分野との連携・協働を深める

- 連携・協働する双方にとってメリット。
- それぞれに領域・分野に固有な「主題の設定」「方法論」（さらには細かな「作法」「しきたり」）を超えて。
- 連携・協働する「より広いコミュニティ」として、**後進の育成**から**先端的探求**までを担っていく。
- **まさに今回のシンポ！**

「宗教」あるいは「宗教心理学」というテーマの潜在力

- 「宗教」は「心」を扱う上で避けて通れないテーマ。
- 「宗教」は人を「人」たらしめている本質（「人類種」を他の動物種から隔てるメルクマール）の一つ。
- 「宗教」は広く「心」を扱う諸学・諸実践にとって「興味深く」「重要な」テーマ。

ささやかながらratikとして出来ること

- **一冊の本**は研究者の人生を変えてしまう**力**を持っている。
- たとえ**小規模でも緻密に議論を深めるための場**を生み出すための**「電子書籍」**。
- メディア・ミックス（**文章＋画像＋音声＋画像**…etc.）など、新しい伝達媒体としての「電子書籍」の**可能性**。

課題：領域・分野間の連携・共同を媒介するのは出版人・編集者の筈だが…

- 最近、出会った異分野（仏教学・教義学／ドイツ観念論・分析哲学）の2人の研究者による2つのタイトル。
  ―「問答における心理的背景の考察」日本仏教教育学研究。
  ―The Logic of Questions and Answers 翻訳企画『問答の論理学』。
- お2人の主題は「問答」。熟読したにもかかわらず、私には、それぞれのかたに、他方の文章を、どのように紹介すれば良いか、分からなかった…。
- このことを悲観せず、ポジティヴに捉えるならば「少なくとも、私は2つのタイトルが同時代に存在することを知っている」…???

http://prezi.com/bo6vm2kd57zl/?utm_campaign=share&utm_medium=copy